

ムラブリ語の音声的バリエーションについての予備的調査

伊藤雄馬

1 はじめに

ムラブリ語 (Mlabri: オーストロアジア語族 Austroasiatic、モン・クメール諸語 Mon-Khmer languages、クム語派 Khmuic) は、音声的バリエーション (以下「変異」) が大きいという調査報告が先行研究によってなされてきた (Egerod & Rischel 1987, Tongkum 1992, Rischel 1995)。しかし、その変異を中心に扱った研究はまだ存在しない。本稿はムラブリ語の変異を体系的に調査するための予備調査として、先行研究において変異が見られるとされた語彙を数十語集め、4名にそれぞれ聞き取り調査を行った。本稿はその調査結果であり、得られたムラブリ語の変異を部分的に記述し、それについて若干の考察を加える。

なお、本稿で用いられる「変異」という用語は、「ある同一の言語共同体に属する成員らによって発音されうる、ある単語の音声形式ら」と定義する。ただし、音声学的に言えば、同じ話者の同じ単語の発音においてでさえ、全く同じ発音は2度とない。よって、それら全ての音声を「変異」とすることもこの定義においては可能であるが、本稿では音韻論的に有意義であると予想されるもの限定して「変異」という用語を用いることとする。

2 社会言語学的情報

2.1 方言、話者数

Rischel (2007: 26) はムラブリ語を A 方言、B 方言、C 方言に分けている。この分類は主に語彙の違いによって分類されている。いくつかの基礎語彙が形式を全く異にすること、また語彙によって共有される方言が異なる点で特徴的である。表 1 は Rischel (2004: Fig. 1) からの例である。

表 1 : 方言間の語彙の差 (Rischel 2004: Fig. 1 より筆者作成)

意味	A 方言	B 方言	C 方言
“to bathe”	t ^h a.lɛ:w	ʔum	
“to return home”	wɔl		mu:
“to speak”	tɔp	gla:ʔ	tɔp
“to come”	leh		

この分類に従うならば、A 方言と B 方言を話す人々はタイ北部のナン県 (Nan) とプレー県 (Phrae) に住み、Sakkarin (forthcoming) によれば、2010 年の段階で、A 方言話者は 351 人、

B 方言話者は 5 名である。C 方言を話す人々はラオスのサヤブリ県 (Sayaburi) に住んでおり、Chazée (2001: 9)¹ によれば、2000 年の段階で 22 名である。なお、本稿で扱うのは A 方言の特にファイ・ユアク村 (Huai Yuak) に住む人々の方言である (図 1)。

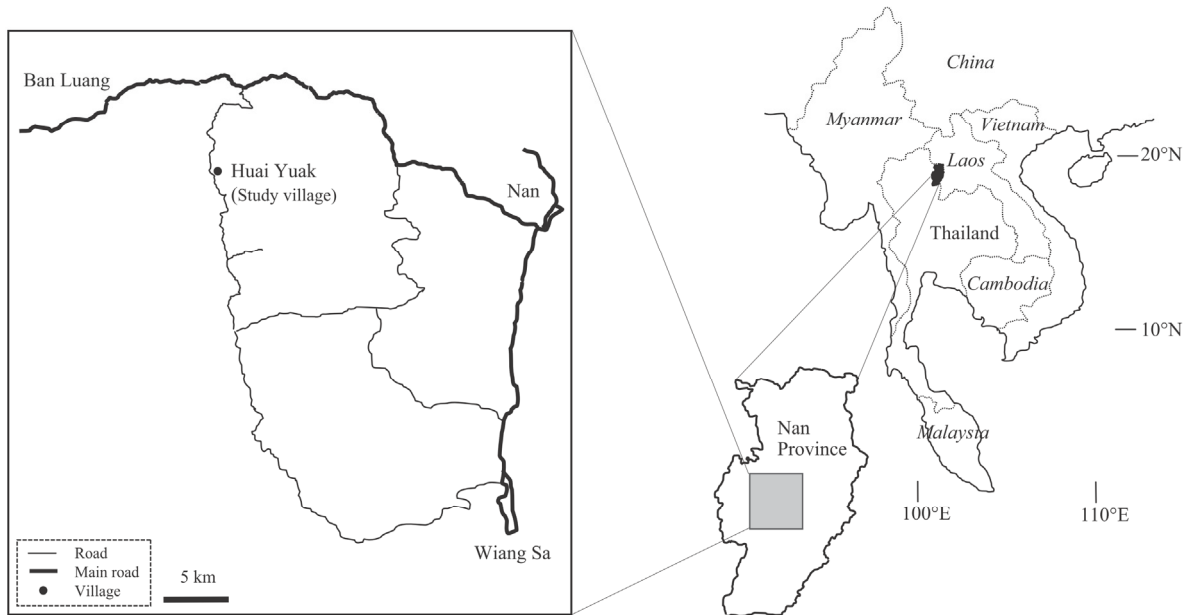


図 1 : 調査地 ファイ・ユアク村 (Ikeya et al. 2009: 248)

2.2 生活の変化と言語使用実態

複数の家族から構成されるバンド (band) を組み、森の中で移動生活を行うのがムラブリの伝統的な生活様式である。狩猟採集を生業とし、精霊信仰によって農耕は禁忌とされていた (Trier 2009)。20 世紀中頃から、森林の開発などにより森での生活が続けられなくなると、フモンの畑を手伝う日雇い労働や、観光業者から雇われて観光の対象となり、森での生活を観光客に披露するなどして生計を立てるようになった (Sakkarin 2009)。

現在タイに住む A 方言の話者は、村を作って定住するようになり、これまで通りフモンの人々から仕事を請け負うか、また政府の出先機関である県の開発センターからの仕事を請け負って生活している (坂本 2011)。

筆者の観察によれば、ムラブリの間ではムラブリ語を使うことがほとんどである。家庭内ではムラブリ語のみが用いられ、子供もムラブリ語を母語として習得しており、ムラブリ語を話せない子供は見られない。ファイ・ユアク村には幼児委託施設が併設されており、そこにはタイ人の保育士が常駐し、幼児に対して中央タイ語 (Central Thai) による教育が行

¹ 題名には *The Mrabri in Laos* とあり、*Mlabri* の *l* が *r* になっている。この表記は Kraisri (1963) にも見られる。Rischel (1989: 53) は、データの比較から *Mlabri* と *Mrabri* は同じ言語であるとしている。Kraisri (1963: 181) 自身の記述から、彼が音声学の訓練を受けていないことが伺われるため、*r* が聞き間違いである可能性が高い。Chazée (2001) は言語学者ではなく、これも聞き間違いか、引用したものが間違っている可能性が考えられる。

われている。また、村には日常的に多くのタイ人やフモンの人々が訪れ、その会話では主に北タイ語 (Northern Thai) が用いられている。

さらに、村にはテレビやラジオが村の中には数台設置されており、放送では中央タイ語が使用されている。そのため、ムラブリの人々、特に若年層における中央タイ語、北タイ語の運用能力は年々高くなっている。

3 前提知識

本節では、本稿の議論に必要となるムラブリ語の音韻論と、先行研究を提示する。

3.1 音素目録

以下の表 2-4 に、Rischel (1995) の音素目録を示す²。

表 2 : 頭子音音素 (Rischel: 1995、一部筆者改変³)

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p, p ^h , b, ^ʔ b [ʔb~β]	t, t ^h , d, ^ʔ d [ʔd~dʰ]	c, c ^h [tʰc~ʃ~s], ʃ [dʒ]	k, k ^h , g	ʔ
摩擦音					h
鼻音	m, ^h m [m̥]	n, ^h n [n̥]	ɲ, ^h ɲ [ɲ̥]	ŋ, ^h ŋ [ŋ̥]	
流音		r, ^h r [r̥], l, ^h l [l̥]			
わたり音	w, ^h w [w̥], ^ʔ w		j, ^ʔ j		

表 3 : 末子音音素 (Rischel: 1995、一部筆者改変)

	両唇	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
閉鎖音	p [pʰ]	t [tʰ]	c [cʰ]	k [kʰ]	ʔ [ʔʰ]
摩擦音					h
鼻音	m	n	ɲ	ŋ	
流音		r, ^h r [r̥], l, ^h l [l̥]			
わたり音	w		j, ^h j		

² Rischel (1995) は B 方言を中心に扱っており、A 方言を対象にする本稿と比較する場合は注意が必要である。ただ、Rischel (1995: 63) では音韻体系のうち、分節音については、両方言とも同じ体系を想定している。実際に A 方言を扱う Egerod & Rischel (1987)、Tongkum (1992) も、Rischel (1995) とほぼ同じ体系を提示している。よって本稿では方言間の差は無視して扱う。

³ Rischel (1995) では、有気音を /ph/ 等 (本稿では /p^h/)、前声門化音 (pre-glottalized consonant) を /ʔb/ 等 (/ʔb/)、無声の鼻音・流音・わたり音を /hm/ (/h^hm/), /hr/ (/h^hr/), /lh/ (/l^h/), /jh/ (/j^h/) と表記する。これらは Rischel (1995) ではいずれも単一の音素として扱われているが、分節音の連続に誤解される恐れがあると考え、表記を改めた。母音に関しては、鼻音の前にのみに現れ、舌の高さが /i/ と /e/ の間に位置する母音音素 /ɪ/ を立てているが、以降の Rischel のムラブリ語に関する論文に /ɪ/ を用いた記述が見られないため、目録から除いてある。また、長母音は /aa/ (/a:/) で記されている。

表 4 : 母音音素 (Rischel: 1995、一部筆者改変)

	前舌	後舌・非円唇	後舌・円唇
狭	i / i:	ɯ / ɯ:	u / u:
半狭	e / e:	ɤ / ɤ:	o / o:
半広	ɛ / ɛ:	ʌ / ʌ:	ɔ / ɔ:
広	a / a:		

3.2 音節構造

ムラブリ語の音節構造は、頭子音と母音は義務的であり、2 子音連続まで許される。よって、C(C)V(C)のように模式化できる。ただし、CCV は観察されない。以下に筆者の A 方言の調査データから具体例を表 5 に示す。

表 5 : 音節の具体例 (筆者データ)

C	(C)	V	(C)	具体例
C		V		/ ² ja:/ “medicine”
C		V	C	/mat/ “eye”
C	C	V	C	/mla?/ “human”

筆者のデータから、頭子音において観察される子音連続を表 6 に示す。

表 6 : 子音連続 (筆者データ)

b-	p-	p ^h -	t-	t ^h -	d-	c-	c ^h -	k-	g-	m-	
-r-	br-	pr-	p ^h r-	tr-	t ^h r-	dr-	cr-	c ^h r-	kr-	gr-	
-l-	bl-	pl-	p ^h l-						kl-	gl-	ml-

ムラブリ語の形態素は、筆者の調査の範囲内では 1 音節語と 1.5 音節語 (sesquisyllabic word) がその大部分を占める。1.5 音節語とは Matisoff (1973: 86) によって作られた形態音韻論的単位を指す用語で、‘a “sesquisyllabic” structure, with morphemes that were “a syllable and a half” in length’ と定義されている。

1.5 音節以上の形態素は、全て弱強格 (iambic) の韻脚パターンを示し、常に語の最終音節に強勢が置かれる。本稿では、強勢のある音節を「主音節」(main syllable) とし、強勢のない音節において軽音節のものを「副音節」(minor syllable)、重音節のものを「無強勢音節」と呼び表す。そして、副音節と主音節の組み合わせからなる形態素を 1.5 音節語 (a) とし、無強勢音節と主音節の組み合わせからなる形態素を 2 音節語 (b) と本稿では定義する。

- (a) [ca.'butʔ] “pig”
- (b) [docʔ.'pan] “rainbow”

副音節には音節核が母音 (c)、流音 (d, e)、鼻音 (f) の場合がある。以下より、母音が音節核の副音節を「開-副音節」、子音が音節核の副音節を「閉-副音節」と呼び表す。

- (c) pa.buul “to kill”
- (d) kl.kil “knee”
- (e) kr.p^hep “butterfly”
- (f) bn.^hneʔ “girl”

以上 Egerod & Rischel (1987) より引用

筆者自身の調査データの範囲で観察された閉-副音節を表 7 に示す。なお、成節的な鼻音は常に主音節の頭子音と調音点を同じにすることから、同器官的な鼻音 (N) と分析する。また、開-副音節の母音はその音価が不安定であるので、表 7 では V で表す。具体例は紙幅の関係上省略する。

表 7: 副音節の種類 (筆者データ)

	b-	p-	p ^h -	t-	t ^h -	d-	c-	c ^h -	k-	g-	ʔ-	m-	r-	l-	h-
V	bV-	pV-	p ^h V-	tV-	t ^h V-	dV-	cV-	c ^h V-	kV-	gV-	ʔV-	mV-	rV-	lV-	
N	bN-	pN-		tN-		dN-	cN-	c ^h N-	kN-						hN-
r	br-	pr-	p ^h r-	tr-	t ^h r-	dr-		c ^h r-	kr-	gr-					hr-
l		pl-							kl-						hl-

3.3 先行研究

ムラブリ語の「音声的な変異の多様さ」についての指摘は多くの先行研究に見られる (Egerod & Rischel 1987: 43, Rischel 1995: 206, Rischel 2004, Tongkum 1992: 45) が、それを分析した研究はない。その中で、Rischel (1995: 207) はムラブリ語に観察される変異を列挙し、またその変数に、「スタイル (speaking style)」と「個人差 (variation across speakers)」の 2 つが関係することを指摘している。ここで言う「スタイル」とは、「速度」や「明瞭さ」の他に、雑談であるか調査であるかといった「状況」、聞き手・話し手は誰かといった「参与者」という要素も含んでいる。

Rischel (ibid.: 209, 210) の指摘した変異をまとめ、以下に示す。

- 副音節

副音節は強勢を持たず、その結果母音の弱化が起き、その音価が不安定である。また、副音節に現れる頭子音は有声音と無声音の間でしばしば揺れる。

- /ʌ~/ɔ/

/ʌ/ と /ɔ/ の間で揺れる語彙がいくつか存在する。A 方言では /ʌ/ を持つ単語が [ɔ] で発音される傾向が観察される。

- 硬口蓋音の前の /a~/ɛ/

硬口蓋音の前の /a/ と /ɛ/ は揺れる傾向にある (しかし、この書き方では /a/ [a~ɛ] かつ /ɛ/ [a~ɛ] という現象なのか、どちらか片方だけの現象なのか、区別できない)。

- 前声門子音

前声門化子音 /^ʔb, ^ʔd, ^ʔw, ^ʔj/ が、しばしばその前声門化を失うことがある。

Rischel (ibid.: 206–207) は、ムラブリ語のこのような「変異が多い」という特徴を興味深いとしながらも、それら変異を支配する変数を特定し、操作することは現時点では難しいとの判断から、調査と考察を断念している。

4 調査概要

4.1 調査目的

「音声的な変異の多様さ」がムラブリ語の特徴の一つである以上、その記述はムラブリ語研究にとって重要な位置を占める。しかし、それは先行研究においてはほとんど行われてこなかった。ムラブリ語の変異についての体系的な調査が今後の研究に必要である。

今後、体系的な調査をおこなうにあたり、どの語彙を調査項目とするべきか、また調査をする上で何に注意するべきかを明らかにすることを目的としている。

4.2 調査方法

本調査では、次の 2 つの調査をおこなった。すなわち、「スタイル」による変異を観察する調査と、「個人差」による変異を観察する調査である。

4.2.1 「スタイル」による変異の調査

1 人の協力者に限定 (つまり「個人差」という変数を固定) し、「スタイル」がどのような影響を与えるのか調査する。今回の調査では協力者 B (後述) に限定した。「スタイル」は「丁寧な発話」と「自然スピードでの発話」の 2 通りで調査した⁴。

4.2.2 「個人差」による変異の調査

「個人差」による変異への影響を調査するために、「スタイル」を一定にし、4 人の異なる協力者に語彙聞き取り調査を行った。調査環境は、協力者にはピンマイクを付けてもら

⁴ 今回の調査では Rischel (1995) の挙げた「参与者」は反映できず、「筆者」と「協力者」の 2 人が「参与者」である状況でしか調査を行えなかった。

い、録音することを伝えたいうえで、いつも通りの速さで発音するように指示した。想定した「スタイル」は「調査」という状況で、かつ「自然なスピードでの発話」である。

4.2.3 調査上の注意

どちらの調査においても共通して注意しなければならないことは、協力者 1 人ずつ行うことである。これは、2 人以上で同時に調査した場合、お互いの発音から影響を受けてしまうことが多々観察されたためである⁵。これと同様の理由で、こちらから誘導して、例えば「～と言ったが、…とも言えるか？」のような質問をすることは避けた。

加えて、変数の操作が成功しているかどうかの判断が難しいこと、また「偶然」や「言い間違い」を現段階では判断し排除することができないため、現れた全ての音声を変異として扱い記述することにする。

4.3 協力者情報

協力者はファイ・ユアク村に住むムラブリ語の母語話者から、世代が重ならず、親族関係において直系でない 4 人を選んだ。協力者情報の概略をまず表 6 に示す。協力者の名前はイニシャルによって表す。

表 8：協力者情報

イニシャル	年齢	性別	学歴	結婚	母語	理解言語
P	60?	男	なし	既婚	MI.	Hm., Tn., NT., CT.
S	40?	男	なし	既婚	MI.	NT., CT., Hm.
B	20?	男	中学卒	未婚	MI.	NT., CT. > Hm.
D	18	女	高校在学	未婚	MI.	NT., CT. > Hm.

「個人差」による変異を扱う調査において、協力者情報は重要となる。よって、以下に、それぞれの協力者の情報について詳細に記す。

P：ファイ・ユアク村に住む。ムラブリの中で最も年齢が高い人物の一人である。正確な年齢は不明。既婚者であり、何人かの女性と結婚した経験を持ち⁶、子供を多く持つ。学歴はなく、タイ文字の読み書きはできない。ムラブリの文化、森の知識について最もよく知る人物の 1 人であり、これまで多くの調査に協力してきた経験を持つ。母語はムラブリ語 (MI.) である。他に北タイ語 (NT.) を理解し操ることができるが、しばしば声調

⁵ 当然の帰結として、しばしば協力者間で発音の不一致が見られる。その場合どちらの発音がより正しいとされるかは、その 2 人の社会的な関係に依るところが大きい。例えば、兄弟ならば兄、年上と年下ならば年上、同年齢同士であれば、より森暮らしの経験が長い方などの発音が優先される。しかし、どちらが正しいか判断がつかない場合も多い。

⁶ ムラブリの人々はその生涯の内に数回配偶者を変えるのが普通である (Trier 2009: 44)。

が正確でない。中央タイ語 (CT.) も聞いて理解するが、話すことは少ない。また、フモン語 (Hm.)、ティン (T'in) の言語 (Tn.)⁷ も理解すると本人は言う。筆者はその使用を確認できていないが、P を知る人物が言うには、P はフモン語もティンの言語も流暢に話すことができるという。古くからフモンと深い関係があったという歴史的背景を考慮すると、フモン語が流暢であっても不思議はない。

- S : ファイ・ユアク村に住む。正確な年齢は不明。大人になるまで森の中に暮らしていたため、森についての知識が豊富である。既婚者であり子供を持つ。学歴はなく、タイ文字については学習経験があるようだが、ほとんど読むことはできない。母語はムラブリ語である。中央タイ語、北タイ語を流暢に話し理解する。中央タイ語と北タイ語を言語として意識的に区別しており、北部のタイ人に対しては北タイ語で応じ、中央からのタイ人に対しては中央タイ語で応じる。フモン語も話し理解することができる。
- B : ファイ・ユアク村に住む。12, 3 歳ほどになるまで森の中で暮らしていた。正確な年齢は不明。同年代の他のムラブリの若者と比べて、比較的長く森で生活していた。未婚である。学歴は、森から出た後、18 歳までの間に中学校卒業相当の教育を受けたため、タイ文字による読み書きが可能である。また、宣教師等からタイ文字によるムラブリ語の表記方法を習得しており、ムラブリ語を読み書きすることが可能である。母語はムラブリ語である。中央タイ語、北タイ語、フモン語が理解できる。中央タイ語と北タイ語の運用能力は P, S よりも高い。フモン語よりも中央タイ語、北タイ語の運用能力が高い。
- D : ファイ・ユアク村出身であり、現役の高校生である。現在はナン県内の高校にある学生寮に住む。ファイ・ユアク村に定住した家庭で生まれたため、森の中での生活は経験していない。未婚である。幼いころからタイ語での教育を受けており、タイ文字の読み書きができる。タイ文字を使って不完全ながらもムラブリ語を読み書きできる。母語はムラブリ語と推測されるが、現在は、村から離れて高校の寮で暮らしており、日常生活で使用するのは中央タイ語か、北タイ語が多い。ムラブリ語についての質問に答えられないこともよくある。他にもフモン語を聞いて理解するが、流暢に話すことはできない。

4.4 調査項目

本調査では、ムラブリ語とりわけ特徴的な音声変異を見せる、A) 1.5 音節語⁸、B) 母音 /ɹ/ または /ɔ/ を持つ語、C) 硬口蓋子音の前に /a/ または /ɛ/ を持つ語、D) 前声門化⁹

⁷ ティンの言語は言語学的には、マル語 (Mal) とプライ語 (Prai) に分けられる。A の言うティンの言語が厳密にどちらの言語を指すかは判断できない。

⁸ 今回の調査では鼻音が音節主音の副音節を持つ 1.5 音節語は調査していない。今後の課題とする。

⁹ /ɹw/ の音素を持つ語彙は、筆者の調査した限りでは観察されなかった。Rischel (1995: 342) においても語彙数が 1 語と非常に少なく、音素として目録に含めるかどうか再度検討する必要がある。

(pre-glottalized) 子音を持つ語、E) 先行研究において音価の広い /c^h/ [tɕ~ʃ~s] を持つ語を、同じ方言を扱っている Egerod & Rischel (1987)¹⁰ から選び調査項目とする。

以下に調査項目の語彙を示す。

表 9 : A) 1.5 音節語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
1)	pa.buul	“to kill”
2)	bak.kah	“flower”
3)	ta.hoʔ	“armpit”
4)	kr.p ^h ɛp	“butterfly”
5)	kr.ʔuŋ	“hole”
6)	rə.map	“upland”
7)	rə.ʔɤk	“chest”
8)	kl.kil	“knee”
9)	kl.muʃ~kul.muʃ	“hair”

表 10 : B) /ʌ/ または /ɔ/ を持つ語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
10)	gʌh	“this”
11)	wʌl	“to return”
12)	ʃʌʃ ^h	“delicious”
13)	mɔʃ	“one”
14)	dɔk	“to put”
15)	kɔk	“pipe”

表 11 : C) 硬口蓋子音の前に /a/ または /ɛ/ を持つ語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
16)	gaj ^h	“nine”
17)	braŋ	“dog”
18)	ʔac	“bird”
19)	gej ^h	“crab”
20)	pej	“to insert”

¹⁰ Egerod & Rischel (1987: 42) は、母音の長短による対立を認めていないが、Rischel (2007: 26) では、母音の長短は弁別的であるとし、Egerod & Rischel (1987) の分析は誤っていたことを認めている。よって、ここで引用する Egerod & Rischel (ibid.) の表記には母音の長短が反映されていない。

表 12 : D) 前声門化子音

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
21)	ʔbuʔ	“slow”
22)	ʔbək	“carry on shoulder”
23)	ʔbiʔ	“caterpillar”
24)	ʔdiŋ	“big”
25)	ʔdi	“good”
26)	ʔjaa	“medicine”
27)	ʔjɛʔ	“far”
28)	ʔjak	“shit”

表 13 : E) /c^h/ を持つ語

No.	Egerod & Rischel (1987)	意味
29)	c ^h ak	“body”
30)	c ^h oʔ	“spade”
31)	c ^h m.bɛp	“mouth”

5 調査結果

5.1 「スタイル」による変異の調査結果

スタイルに関して、音声学的に有意義な結果が得られたのは、A) 1.5 音節語のみだった。

表 14 : 「スタイル」 : A) 1.5 音節語

No	先行研究の形式	丁寧	自然スピード
1)	pa.bu:l “to kill”	[pap ^ː .bu:l]	[pə.bu:l]
2)	bak.kah “flower”	[bak ^ː .ka:h]	[ba.ka:h]~[bə.ka:h]
3)	ta.hoʔ “armpit”	[ta.ho:ʔ]~[taʔ ^ː .ho:ʔ]	[to.ho:ʔ]~[tə.ho:ʔ]
4)	kr.p ^h ɛp “butterfly”	[ra.p ^h ɛp ^ː]	[rə.p ^h ɛp ^ː]~[r.p ^h ɛp ^ː]
5)	kr.ʔuŋ “hole”	[kur.ʔuŋ]	[kr.ʔuŋ]
6)	rə.map “upland”	[ra.ma:p ^ː]~[raʔ ^ː .ma:p ^ː]	[ra.ma:p ^ː]~[rə.ma:p ^ː]
7)	rə.ʔɯk “chest”	[la.ʔɯk ^ː]~[laʔ ^ː .ʔɯk ^ː]	[la.ʔɯk:]
8)	kl.kil “knee”	[kil.ki:l]~[kɨl.ki:l]	[kl.ki:l]
9)	kl.mu:j “hair”	[kul.mu:j]~[kʷl.mu:j]	[kl.mu:j]

先行研究において開-副音節の語は、「丁寧」では末子音を持ち無強勢音節になる語が観察される (1, 3, 6, 7)。末子音は、主音節の頭子音と同じ調音点の閉鎖音 (1)、もしくは声門閉鎖音が現れる (3, 6, 7)。「自然スピード」では、副音節に末子音が現れることはない。

また、「丁寧」では (2) を除く全ての母音が [a] となり、「自然スピード」では曖昧母音 (1, 3, 4, 6) か、主音節の母音が非主音節と同じ母音となる (3)。

先行研究において閉-副音節の語は、「丁寧」では子音連続の間に母音の挿入が見られ、無強勢音節となる語がいくつか観察される (5, 8, 9)。挿入される母音は主音節の母音と同じ (5, 8, 9) か、円唇性を同じくした中舌の母音が現れる (8, 9)。「自然スピード」ではこの挿入母音は観察されない。

また、先行研究では閉-副音節であるとされたものが、調査では初頭の閉鎖音 /k/ が落ち、母音が挿入され開-副音節 [ra] になっている例 (4) や、先行研究ではふるえ音 /r/ であったものが、側面接近音 [l] で観察された例があった (7)。先行研究で 2 音節語であったものが、「自然スピード」で開-副音節を持つ 1.5 音節語として観察された (2)。

また、ふるえ音 [r] が単独で副音節を形成している例が観察された (4)。

5.2 「個人差」による変異の調査結果

表 15: 「個人差」 A) 1.5 音節語

No.	先行研究の形式		P	S	B	D
1)	pa.bu:l “to kill”	[pa]	[pa.bu:l]	[pa.bu:l]	[pa.bu:l]	[pa.bu:l]
2)	ba.kah “flower”	[ba][h]	[ba.ka:h]			
		[pa][h]		[pa.ka:h]	[pa.ka:h]	
		[[?] ba][h]		[[?] ba.ka:h]		
		[pa][∅]				[pa.ka:]
3)	ta.ho? “armpit”	[tə]	[tə.ho:ʔ [?]]			
		[to]		[to.ho:ʔ [?]]	[to.ho:ʔ [?]]	
		[ta]				[ta.ho:ʔ [?]]
4)	kr.p ^h ɛp “butterfly”	[kr]	[kr.p ^h ɛp [?]]			
		[p ^h r]		[p ^h r.p ^h ɛp [?]]		
		[rə]			[rə.p ^h ɛp [?]]	
		[pr]				[pr.p ^h ɛp [?]]
5)	kr.ʔuŋ “hole”	[kl]		[kl.ʔuŋ]		[kl.ʔuŋ]
		[kr]	[kr.ʔuŋ]		[kr.ʔuŋ]	
6)	rə.map “upland”	[rə]	[rə.ma:p [?]]			
		[kr]		[kr.ma:p [?]]		
		[ra]			[ra.ma:p [?]]	[ra.ma:p [?]]
7)	rə.ʔɤk “chest”	[la][ɤ]	[la.ʔɤk [?]]		[la.ʔɤk [?]]	
		[kl][ɤ]		[kl.ʔɤk [?]]		
		[kl][w]				[kl.ʔwɤk [?]]
8)	kl.kil “knee”	[kr]	[kr.kil]			
		[kl]		[kl.kil]	[kl.kil]	[kl.kil]
9)	kl.mu:j “hair”	[kr]	[kr.mu:j]			
		[kl]		[kl.mu:j]	[kl.mu:j]	[kl.mu:j]

(1) を除く全ての例で、副音節が「個人差」による変異を示している。それに対して主音節に変異が見られたのは (7) のみである。

副音節に見られる変異を分類すると、開-副音節では、頭子音の有声、無声が異なる例 (2)、母音が異なる例 (3, 6) が観察される。母音が異なる場合は、その範囲は曖昧母音 [ə]、主音節と同じ母音、広母音 [a] の範囲である (3, 6)。

閉-副音節では、成節的な子音がふるえ音か側面接近音かで異なる例 (5, 8, 9)、共通要素が [r] のみで、頭子音が異なる例 (4) がある。また、音節構造が異なる例 (4, 6, 7) も観察される。

さらに、4人とも異なる副音節が現れた語も観察される (4)。

表 16: 「個人差」 B) /ʌ/ または /ɔ/ を持つ語

No.	先行研究の形式	P	S	B	D
10)	gʌh “this”	[ʌ]	[gʌh]		
		[ɔ]		[gɔh]	[gɔh]
11)	wʌl “to return”	[ʌ:]	[wʌ:l]	[wʌ:l]	[wʌ:l]
12)	ʃʌjʰ “delicious”	[ʌ:][ç]	[dʒʌ:ç]		
		[ɔ:][jh]		[dʒɔ:jh]	
		[ɔ:][j]			[dʒɔ:j]
13)	mɔj “one”	[ɔ]	[mɔj]	[mɔj]	[mɔj]
14)	dɔk “to put”	[ɔ]	[dɔkʰ]	[dɔkʰ]	[dɔkʰ]
15)	kɔk “pipe”	[ɔ]	[kɔkʰ]	[kɔkʰ]	[kɔkʰ]

先行研究において /ɔ/ を持つ語は、本調査でも全て [ɔ] が現れたのに対し、/ʌ/ を持つ語は (11) 以外、[ʌ] と [ɔ] の両方が「個人差」として現れた。また、協力者 P は非円唇母音 [ʌ]、P 以外は円唇母音 [ɔ] が優勢であった。

また、(12) の末子音 /jʰ/ には、P は摩擦音 [ç]、S は有気わたり音 [jh]、B, D はわたり音 [j] といった個人差が見られた。

表 17: 「個人差」 C) 硬口蓋子音の前に /a/ または /ɛ/ を持つ語

No.	先行研究	P	S	B	D	
16)	gajʰ “nine”	[a][ç]	[gaç]			
		[a][jh]		[gajh]		
		[a][j]			[gaj]	[gaj]
		[ɛ][ç]	[gɛç]			
17)	braŋ “dog”	[a]	[braŋ]	[braŋ]	[braŋ]	
18)	ʔac “bird”	[a]	[ʔacʰ]	[ʔacʰ]	[ʔacʰ]	
19)	gejʰ “crab”	[ɛ][ç]	[gɛç]			
		[ɛ][jh]		[gejh]		
		[ɛ][j]			[gej]	[gej]
20)	pej “to insert”	[ɛ]	[pej]	[pej]	[pej]	

/ɛ/ を持つ語は、調査でも全て [ɛ] が現れたのに対し、/a/ を持つ語の (16) は、P の発音に限って [ɛ] が現れ、個人内で自由変異の関係にあった。

また、末子音 /ɸ/ について、B) 同様、P は摩擦音 [ç]、S は有気わたり音 [jh]、B, D はわたり音 [j] といった個人差が見られた (16, 19)。

表 18 : 「個人差」 D) 前声門化子音

No.	先行研究の形式		P	S	B	D
21)	ʔbuʔ “slow”	[ʔb]	[ʔbuʔ]	[ʔbuʔ]	[ʔbuʔ]	
		[ʔb]				[buʔ]
22)	ʔbək “to carry”	[ʔb]	[ʔbək]	[ʔbək]	[ʔbək]	
		[b]				[bək]
23)	ʔbiʔ “caterpillar”	[ʔb]	[ʔbiʔ]	[ʔbiʔ]	[ʔbiʔ]	
		[b]				[biʔ]
24)	ʔdiŋ “big”	[ʔd]	[ʔdiŋ]	[ʔdiŋ]	[ʔdiŋ]	
		[d]				[diŋ]
25)	ʔdi “good”	[ʔd]	[ʔdi:]	[ʔdi:]	[ʔdi:]	
		[d]				[di:]
26)	ʔja “medicine”	[ʔj]	[ʔja:]	[ʔja:]	[ʔja:]	
		[j]				[ja:]
27)	ʔjeʔ “far”	[ʔj]	[ʔjeʔ]	[ʔjeʔ]	[ʔjeʔ]	
		[j]				[jeʔ]
28)	ʔjak “shit”	[ʔj]	[ʔjak]	[ʔjak]	[ʔjak]	
		[j]				[jak]

P, S, B では前声門化音 [ʔb, ʔd, ʔj]、D は有声破裂音 [b, d] もしくはわたり音 [j] が観察された。

表 19 : 「個人差」 E) /cʰ/ を持つ語

No.	先行研究の形式		P	S	B	D
29)	cʰak “body”	[ʃ]	[ʃak]			
		[s]		[sak]	[sak]	[sak]
30)	cʰoʔ “spade”	[s][o]	[soʔ]	[soʔ]	[soʔ]	[soʔ]
		[s][o:]	[so:ʔ]			
31)	cʰm.bep “mouth”	[ʃ]	[ʃim.bep]	[ʃm.bep]		
		[s]			[sm.bep]	[sm.bep]

摩擦音 [tç] は観察されなかった。また後部歯茎摩擦音 [ʃ] は A, B の 2 人のみに観察され、B, D はいずれの語彙も [s] で発音された。

(31) は協力者 P に限ってであるが、無強勢音節となり、2 音節語になっている。

6 考察

本調査は予備的調査であり、得られたデータからの一般化は別稿でおこなうことにしたい。ここでは、ムラブリ語の変異を調査する上で、何に注意する必要があるのかを考察する。

6.1 副音節

まず、「スタイル」と「個人差」両方の調査において、多くの変異がみられたのは 1.5 音節語の特に副音節であった。

「スタイル」をコントロールした調査では、「丁寧」に発話されると 2 音節語的、「自然なスピード」だと 1.5 音節語的に発音される傾向が観察された。例えば、Egerod & Rischel (1987) で 2 音節語として表記されている、No.2 「花」/bak.kah/ は、本調査では「丁寧」では [bakˀ.kah] で 2 音節語、「自然なスピード」では [ba.kah~bə.kah] と 1.5 音節語であり、「スタイル」によって形態素の音節構造が異なる。よって、ある語が 1.5 音節語か 2 音節語のどちらであるかは、ムラブリ語において判断が難しいことがわかる。

また、「個人差」による調査においても、1.5 音節語の副音節に見られる変異が顕著であった。例えば、No.4 「蝶」では、協力者 4 人とも異なる副音節を示し、その範囲は [kr~pʰr~rə~pr] と、ある種の傾向は認められるものの、音韻的解釈に問題が残る。

以上から、ムラブリ語の変異について、1.5 音節語の特に副音節の調査が重要であると考える。

6.2 年代差と磨滅の可能性

「個人差」の調査結果の内、「年代差」とも解釈可能な例がいくつか観察された。末子音の無声わたり音 /-jʰ/ は、P は摩擦音 [ç]、S は有気わたり音 [jh]、B, D はわたり音 [j] として発音されている。Rischel (1995: 76) においても、/-jʰ/ の異音として歯擦音 (strident) が聞かれることがあると述べているが、その条件については触れておらず、自由変異扱いである。

今回の調査の範囲では、摩擦音 [ç] で発音するのは老年層の P、有気わたり音で発音するのは [jh] S のような 40 代近くの中年層、そしてわたり音 [j] で発音するのは B, D のような若年層とでき、これは「年代差」の可能性が示唆される。また、B, D の音韻体系では /-jʰ/ と /-j/ が合流している可能性が考えられる。

また、前声門化子音 /ʰb, ʰd, ʰj/ は D では観察されず、代わりに有声閉鎖音、わたり音 /b, d, j/ が観察された。よって D の音韻体系において頭子音の前声門化子音 /ʰb, ʰd, ʰj/ が有声閉鎖音、わたり音 /b, d, j/ と合流している可能性が考えられる。これは、D の協力者情報を照らし合わせて考えると、D に磨滅 (attrition) が起きていることが示唆される。

以上から、若年層の話者を調査する際には、磨滅を想定しながら調査をする必要がある。

7 まとめ

本稿はムラブリ語の多様な変異の実態を明らかにする調査の準備として、「スタイル」と「個人差」といった変数を操作して予備的調査を行った。

その結果、1.5音節語は「丁寧」なスタイルにおいて2音節語のように発話されること、また主音節に比べ「個人差」が顕著であることが明らかになり、ムラブリ語の変異の多くはこの副音節に関係することがわかった。

また「個人差」のいくつかは「年代差」に還元できる可能性が高く、加えて、ムラブリ語話者の若年層に「磨滅」が起きている可能性が高いことを示唆した。

謝辞

本稿は2011年7月下旬に筆者自身が行ったフィールドワークの調査結果に基づいている。この調査は多くの人々、特に調査に協力してくれたムラブリの人々、またナーン県開発センターの職員の人々の協力なくしては成しえなかった。また、論文執筆にあたって、言語記述研究会の皆様から多くの助言をいただいた。特に倉部慶太氏には論文の構成から内容まで詳細に原稿を見ていただいた。これら全ての人々に深く感謝を申し上げる。

略号	英語	日本語
C	Consonant	子音
V	Vowel	母音
N	Homorganic nasal	同器官的鼻音
ML	Mlabri	ムラブリ語
CT	Central Thai	中央タイ語
NT	Northern Thai	北タイ語
Hm	Hmong	フモン語
Tn	T'in	ティンの言語 (Mal, Prai)

参考文献

- 坂本比奈子. (2011) 「ムラブリ族の移住 採集狩猟民, 他民族支配, 土地所有, 言語文化多様性, 山地民対策」 『言語と文明』 9: 103-111. 東京: 麗澤大学.
- Chazée, Laurent. (2001) *The Mrabri in Laos: A World under the Canopy*. Bangkok: White Lotus.
- Egerod, Søren and Rischel, Jørgen. (1987) "A Mlabri-English Dictionary." *Acta Orientalia* 48: 35–88.
- Ikeya Kazunobu and Nakai Shinsuke. (2009) "Historical and contemporary relations between Mlabri and Hmong in Northern Thailand." *Senri Ethnological Studies* 73: 247–261.
- Kraisri Nimmanahaeminda. (1963) "The Mrabri language." *The journal of the Siam Society* 11 Part 2. 179–184.
- Matisoff, J. A. (1973) "Tonogenesis in Southeast Asia." *Consonant types and Tone*: 71–95. Los Angeles: UCLA.

- Rischel, Jørgen. (1989) "Fifty years of research on the Mlabri language: A re-appraisal of old and recent field work data." *Acta Orientalia* 50: 49–78.
- . (1995) *Minor Mlabri: A Hunter-Gatherer Language of Northern Indochina*. Copenhagen: Museum Tusulanum.
- . (2004) *Pan-dialectal Databases: Mlabri, an Oral Mon-Khmer Language*. Lexicography Conference. Payap University, Chiangmai.
- . (2007) *Mlabri and Mon-Khmer: Tracing the History of a Hunter-Gatherer Language*. Copenhagen: Royal Danish Academy of Sciences and Letter.
- . (2009) *Sound Structure in Language*. New York: Oxford University Press.
- Sakkarin, Na Nan (2009) "Resource contestation between hunter-gatherer and farmer societies: Revisiting the Mlabri and the Hmong communities in Northern Thailand." In *Interactions between Hunter-Gatherers and Farmers: from Prehistory to Present*. 229–246. Osaka: National Museum of Ethnology.
- . (forthcoming) "The incomplete sedentarization of nomadic populations: The case of the Mlabri."
- Thongkum, Theraphan, L. (1992) "The language of the Mlabri (Phi Tong Luang)." In *The Phitong luang(Mlabri): A hunter Gather Group in Thailand*. 43–65. Bangkok: Odeon Store.
- Trier, Jesper (2009) *Invoking the Spirits: Fieldwork on the Material and Spiritual Life of the Hunter-Gatherers Mlabri in Northern Thailand*. Copenhagen: Aarhus University Press.